

九州天皇家論 3章 神武東征

九州天皇家の誕生

小倉北区「高千穂の宮」の神武

古代日本史のキーパーソンは神武天皇である。だが、記・紀に登場する神武天皇は、実在したのか否か。意見の分かれる所でもある。私たちは記・紀の神武物語を正確に読み解いていこう。要は、記・紀の神武物語の正確な解説にかかっている。

私たちがよく耳にする神武東征物語は、「日向國(宮崎県)」から出立、「吉備(岡山)」に滞在、東大阪の「盾津」に上陸、「生駒」の長髓彦と会戦、敗北、大阪湾を南下、「熊野(三重県)」に再上陸、紀伊半島を北上して、「橿原(奈良)」の地に都を開いた、というものである。だが、戦前はいざ知らず、戦後はこの物語に様々な異議が唱えられてきた。確かに津田左右吉ならずとも、神武奈良東征は虚構のように見える。果たして神武は九州宮崎から大阪湾まで侵入して戦い、紀伊半島を迂回して熊野に上陸し、紀伊半島を横断して奈良に入ったのか。

例えば、熊野から奈良に抜ける道を車で走ってみるといい。地図もなく交通標識も無ければ、熊野から奈良に行き着くのは困難であろう。大阪湾を南下して熊野まで行ったといわれる。何故、そこまで迂回する必要があるのか。せめて和歌山市ぐらいで再上陸していれば食糧の心配をしなくてもいいのに、熊野とは。視界のみが認識可能な世界であった超古代にそのようなことが果たして可能だったのか。様々な疑問が生じる。が、それはさておき、記・紀の神武東征物語に入り込み、読み解いてみよう。

神武天皇の言葉が記紀に記録されている。神武天皇は東征にあたってその目的を次のように語っている。

昔我が天神、高皇産靈尊(たかみむすひのみこと)・大日靈(おほひるめ)尊、此の豊葦原瑞穂國を
挙(のたまひあ)げて、我が天祖(あまつみおや)彦火瓊瓊杵(ひこほのくにぎの)尊に授けたまへけり。
是に、火瓊瓊杵尊、天關(いはくら)を關(ひきひら)き雲路を抜け、仙驪(みさきはらい)駈(お)ひて
戻止(いた)ります。是の時に、運(よ)、鴻荒(あらき)に属(あ)ひ、時、草昧(くらき)に鍾(あた)れり。
故、蒙(くら)くして正(ただしきみち)を養ひて、此の西の偏(ほとり)を治(しら)す。皇祖皇考(みおや)
、及神(かみ)乃聖(ひじり)にして、慶(よろこび)を積み暉(ひかり)を重ねて、多(さわ)に年所(とし)
を歴(へ)たり。天祖(あまつみおや)の降臨(あまくだ)りましてより以速(このかた)、今に一百七十九
萬二千四百七十余歳。而(しか)るを、遼遙(とほくはるか)なる地、猶未だ王澤(みうつくしび)にうる
ほさず。遂に邑に君有り、村に長(ひとごのかみ)有りて、各自境(さかひ)を分ちて、用(も)て相凌ぎ
きしらはしむ。抑又(はたまた)、塩土老翁(しほつつのをじ)に聞きき。曰ひしく、『東(ひがしのかた)
に美(よ)き地(くに)有り。青山四周(よもにめぐ)れり。其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り』
といひき。余(われ)謂(おも)ふに、彼の地(くに)は、必ず以て大業(あまつひつぎ)恢弘(ひらきの)
べて、天下に光宅(みちを)るに足りぬべし。蓋(けだ)し六合(くに)の中心(もなか)か。その飛び降る
という者は、是饒速日(にぎはやひ)と謂うか。何ぞ就(ゆ)きて都つくらざらむ」とのたまふ。

(日本書紀 神武天皇)

この神武天皇の言葉には真実がこめられている。私たちはこの神武の言葉の分析から始めていこう。

「豊葦原瑞穂國」

神武天皇は述べる。

昔我が天神、高皇産靈尊・大日靈尊、此の豊葦原瑞穂國を挙げて、我が天祖彦火瓊瓊杵尊に授けたまへけり。

この言葉には二つの内容が含まれている。

- (1) 高皇産靈尊と大日靈尊(天照大神)が「豊葦原瑞穂國」を神武の曾祖父、瓊瓊杵尊に授けたこと。
- (2) 神武は「此の豊葦原瑞穂國」と云っている。従って、神武は、今、「此の豊葦原瑞穂國」にいる。

「豊葦原瑞穂國」とは「豊葦原中国」である。「豊」とは「豊かな」という意味ではない。「豊」とはかつてこの國を支配した女王の名前である。彼女はまたの名を「伊豫」とも云った。「豊」と「伊豫」の二つの名前をもった女王が「葦原中国」の支配者であった。女王「豊」は「伊豫二名嶋」の女王だった。「伊豫二名嶋」とは彦島である。現在の彦島は一つの島であるが、超古代は幾つかの島に分かれていた。その一つが「伊豫二名嶋」と呼ばれた島であった。現在の彦島老町がその嶋である。この嶋の女王だった「豊(伊豫)」は関門海峡の主要な港町を支配していた。「筑紫嶋(門司港)の豊國」、「豊秋津島(門司大積)」も彼女の支配下にあった。

天孫、瓊瓊杵(ニニギ)が降った「豊葦原中国」も港町であった。その國とは小倉北区である。この地域は紫川の下流で稲作の先進地域、故に「瑞穂の國」と称えられていた。

神武は此处に居た。神武は「天(彦島)」から「豊葦原中国(小倉北区)」に降ってきた瓊瓊杵(ニニギ)の正統の子孫として「豊葦原中国」に君臨していた。瓊瓊杵尊の「天孫降臨」以降、「天(あま)」王朝の一つの中心地が、「豊葦原中国」、つまり小倉北区だった。神武はここにいたのである。

小倉北区に侵攻した神武の曾祖父、瓊瓊杵尊は、「木花開耶姫」を娶り、所帯を持った。彼女の別名は「神吾田鹿葦津姫」である。「一書(あるふみ)」では次のように書いる。

日向國の吾田邑の吾平津姫を娶きて、妃としたまふ (日本書紀神代下)

神武の曾祖父、瓊瓊杵尊の後は、「吾平津姫」という名前である。その出身は「日向國の吾田邑」である。「吾田邑」の「吾田(アタ)」とはなにか。現在ではその意味は失われているが、「アタ」には意味があった。

黄泉から逃げ帰ったイザナギはこの小戸、「竺紫日向之橘阿岐原」で禊[ミソギ]し、綿津見神や簡之男三神などを成す。海神綿津見神は「阿田津のミ」、つまり東征に出発する神武を出迎える珍彦が釣りをして待っていた曲浦(アタのウラ)の首長の職位を神格化したものだ。アタとは「親指と中指とを開いた広さ」とあるが、原初はその親指と中指が描く形(L字型)を指していた、と見る。(穴戸伝承「磐余彦、東征す」西井健一郎)

「吾田(アタ)」とは直角を意味する。同じ用法の「曲浦(アタウラ)」とは「直角に曲がる津」を意味し、彦島瀬戸の港のことである。神武の曾祖父、瓊瓊杵尊の妻、「木花開耶姫(吾平津姫)」は彦島小戸の娘であった。

瓊瓊杵尊は「豊葦原中国」に進出して後、妻を出身地である彦島から迎えていたのである。その曾孫、神武もまた同じ「葦原中国」に住んでいた。瓊瓊杵尊が降臨して以来、神武まで四代に渡ってこの地に王宮を構えていた。

高千穂宮は小倉北区

神武の宮は「豊葦原瑞穂國」にある。古事記ではどう記述されているか。

神倭伊波礼毘古命、其の伊兄五瀬命と二柱、高千穂宮に坐して議りて云りたまひけらく「何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こし看さむ。猶東に行かむ」とのりたまひて、即ち日向より発たして筑紫に幸行でましき。(古事記)

神武が居た宮の名前は「高千穂宮」である。この「高千穂宮」はどこに存在したのか。この宮は「古事記」上巻にすでに登場している。天孫、瓊瓊杵尊は「木花佐久夜毘売」との間に二人の子どもを授かる。兄が「火照命」、弟が「火遠理命(別名、天津日高日子穗穗手見命)」である。兄は「海佐知毘古」として海で仕事をし、弟は「山佐知毘古」として山で仕事をしていた。この弟が瓊瓊杵尊の跡を継ぐ。彼が暮らした宮が「高千穂の宮」である。

故、日子穗穗手見命は、高千穂宮に五百八十年坐しき (古事記上巻)

神武の祖父が居た宮が「高千穂の宮」である。この記事は普通に読めば疑わしい。滞在期間が長すぎる。580年もこの宮に居た。こんなに生きる人はいない。だが、この時代の580年とは、現在の580年ではない。では今の時間で云えば何年になるのか。次章で詳しく述べるが、結論を先に云えば、この暦は24倍歴である。現在の一年を24年と計算する。そうすると、580年は約24年に当たる。神武の祖父は「高千穂宮」に24年居たというのである。

「日子穗穗手見命」の子どもが「鵜葺草葺不合命」である。この人が神武の父である。当然、父も「高千穂宮」に居た。そして神武もまた「高千穂の宮」に居たと古事記は記録している。祖父・父・神武と三代続いて居た宮が「高千穂の宮」である。この宮の名前が瓊瓊杵尊が天降った「高千穂」に由来していることは明らかである。

「高千穂」とは



「高千穂」とは「高+千穂」という合成語である。「高」は普通の意味の「高い」である。「千穂」は瓊瓊杵尊がその地で「稲穂」を投げた古事に因んで付けられて地名である。

瓊瓊杵尊は降臨の際、何故、稲穂を持っていたのか。天孫降臨の物語は新たな弥生国家建設の物語である。新たな弥生国家(弥生集落)建設には稲作が欠かせない。その為に大事な稲種(稲穂)を携えていたのである。では、何故、その大切な稲穂を投げたか。その理由は「風土記」が記録している。急に暗くなったからである。だから、この暗闇は夜が来たからではない。ではなぜ、急に暗くなったのか。通常は日食だと解する人が多い。古代人は、日食がなぜ生じるか知らなかったから、日食を畏怖したのだと。だが、日食は暗くなるといっても

あたりが見えないことはない。また、そう長くは続かない。日食ではない。ではなにか。霧である。濃霧で前が見えなくなった。このままでは遭難する。故に、大切な稲穂を山の神に供えたのである。

瓊瓊杵尊が登った「高千穂」とは企救半島の足立山である。足立山は霧がよくかかるので、「霧ヶ岳」と呼ばれている。「記伝」には「此高千穂は霧島山を云うなり。書紀に霧之高千穂ともある。襲は大隅國なれば、是霧島山をも高千穂と云し証なり」と、書いている。「高千穂」には霧がよくかかり、本来は「霧島山」と呼ばれたと伝えられている。足立山も本来の名は「霧ヶ岳」であろう。「足立山」という名の由来は796年の和氣清麻呂の故事による。

一書では、『日向の襲の高千穂のクシ日の二上峯』と表記されている。その意味は「西の襲の國の高千穂のクシ日」の「二上峯」である。「西」は、「筑紫西」と同じで「筑紫・西」の「熊襲の國」という意味である。「熊襲の國」の中の高千穂のクシ日の二上峯」には二つの峰があったことが分かる。一つの峰は足立山である。もう一つの峰とは妙見山である。

「穂穂手見命」―「鵜葺草葺不合命」―「神武」と三代続いた王家の宮、「高千穂の宮」は小倉北区の足立山の麓にあった。

下の写真は、小倉北区に存在する足立山妙見宮である。本殿の扁額には、「御祖(みおや)」とある。「御祖(みおや)」とは「瓊瓊杵尊」のことであろう。瓊瓊杵尊はこの地に降臨して、「筑紫」の開発に“尽くし”たので「筑紫(つくし)」と云う地名となった、という地名説話が伝わる。

神武が居た「高千穂宮」があった國は「日向」と記されている。この「日向」とは小倉北区である。



「東に美き地」

神武は、小倉北区の「高千穂宮」で、東征を決意し、この宮から出発した。

神倭伊波礼毘古命、其の伊兄五瀬命と二柱、高千穂宮に坐して議りて云りたまひけらく「何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こし看さむ。猶東に行かむ」とのりたまひて、即ち日向より発たして筑紫に幸行でましき

目的地は「筑紫」である。

抑又(はたまた)、塩土老翁(しほつつのをじ)に聞きき。日ひしく、『東(ひがしのかた)に美(よ)き地(くに)有り。青山四周(よもにめぐ)れり。其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り』といひき。余(われ)謂(おも)ふに、彼の地(くに)は、必ず以て大業(あまつひつぎ)恢弘(ひらきの)べて、天下に光宅(みちを)るに足りぬべし。蓋(けだ)し六合(くに)の中心(もなか)か。その飛び降るという者は、是饒速日(にぎはやひ)と謂うか。何ぞ就(ゆ)きて都つくらざらむ」とのたまふ。

(「日本書紀 神武天皇」)

この記述は「青山四周(よもにめぐ)れり」、「蓋(けだ)し六合(くに)の中心(もなか)か」というように奈良を想定しているかのようである。しかし、神武に奈良認識があったのか。奈良と読んだのは私たちの誤読である。

是の時に、運(よ)、鴻荒(あらき)に属(あ)ひ、時、草昧(くらき)に鍾(あた)れり。故、蒙(くら)くして正(ただしきみち)を養ひて、此の西の偏(ほとり)を治(しら)す。

神武は瓊瓊杵尊が「葦原中国」に降ってから、「くらい中にありながら自ら正しい道を養い」「西の偏を治めてきた」と述べている。「西」という自己認識は「日向」と一致する。「日向」は本来「日が向かう」という意味である。「西の偏」という神武の認識は妥当である。だが「偏」と述べている。「偏」とは中心を外れているという意味である。神武は小倉北区は王朝の中心から西に偏っていると認識していた事になる。では、王朝の中心とはどこか。

「此の西の偏(ほとり)を治(しら)す」

神武の言葉の「西の偏」とは「豊葦原瑞穂國(小倉北区)」である。では、なぜ、この国(小倉北区)が「西の偏(ほとり)」なのか。なぜ、神武は「自分のいる国は西の僻地である」と認識していたのか。なぜ「東(ひがしのかた)に美(よ)き地(くに)有り」と、羨望のまなざしで、「東」を見ていたのか。

神武が暮らしていた「豊葦原中國(小倉北区)」は「日向」と呼ばれていた。「日向」とは西の意である。だから神武が小倉北区を「西の偏」と認識していたのは当然といえる。「日向」は西の意であるが、この表記は単独で使われずに、「筑紫日向」と使用されてきたことは、既に見たとおりである。起点は「筑紫」である。

私たちはある都市の場所を説明する時、誰でもよく知っている都市を起点にして説明する。例えば、守口市はどこかと尋ねられた時は、「大阪市の東北ですよ」と、大阪では誰でも知っている大阪市を起点に説明する。それは大阪市の大阪の中心だからである。中心となる都市を起点に他の都市の地理を説明する。

当時の中心都市は「筑紫」

同じことが神武の時代でも行われている。神武が居た小倉北区は、「筑紫の西」と説明されていた。つまり、当時の中心都市は「筑紫」だったのである。神武の時代には、遙かな祖父の地、「天(彦島)」の繁栄はすでに終わっていた。天(彦島)は政治経済的使命を終え、天(あま)王朝の中心は天孫降臨の地、「筑紫」に移っていた。この「筑紫」とは「天(あま)」王朝の「筑紫」、「國産み筑紫」、門司港である。門司港は九州と本州を結ぶ交通の要所である。ここで関門海峡を渡るのが最も早い。多くの人が行き交い、多量の物資が行き交った。「筑紫」は、関門海峡の弥生国家の中では最も繁栄していた國だったと思われる。「大八洲」の中心は「筑紫(門司港)」にあった。瓊瓊杵尊が「筑紫」の開発に尽くし(ツクシ)たのは、この港町の重要性がよく分かっていたからであろう。

「筑紫(門司港)」が、神武の時代、王都にふさわしい國であった。故に、この國を起点に、神武の居た小倉北区は、「筑紫日向(筑紫の西)」と表記されていたのである。神武が王朝の中心として政権を執るにふさわしいと見ていた國(首都)は「日向(小倉北区)」ではなく、「筑紫(門司港)」だった。故に、「即ち日向より発たして筑紫に幸行でましき」と、その目的地を定めたのである。

ところで、「西の偏」「東の地」という地理認識は神武だけのものではない。神武を始祖とする王朝の共通・共有の認識である。以来、「西の國」「東の國」という世界認識は神武の王朝内で一貫している。

而(しか)るを、遼遙(とほくはるか)なる地、猶未だ王澤(みうつくしび)にうるほさず。遂に邑に君有り、村に長(ひとごのかみ)有りて、各自境(さかひ)を分ちて、用(も)て相凌ぎきしろはしむ。

神武は云う。それぞれの邑に「君」が居り、村には「長」が居り、各自が「境」を決めて、凌ぎ合っている。國はそれぞれ分立して、統一されていない。これでは駄目だ。

そう思った神武は統一国家の建設に向けて行動を開始した。神武は瓊瓊杵尊の正統の後継者として、王朝の“中央集権化”に乗り出したのである。

神武東征前夜の世界

